

## 障害のある同級生との過去の体験と 社会考慮および社会志向性・個人志向性についての基礎的研究

池 田 智 子

A Fundamental Study on the Interactions with Friends with Disabilities, Social Consideration, and Social and Individual Orientedness.

Satoko IKEDA

The aim of this study was to examine the relation between the interactions with friends with disabilities, social consideration, and social and individual orientedness among university students. It was hypothesized that the past experiences with friends with disabilities orient their entity to society, and facilitate their degree of social consideration, and social and individual orientedness. The results of the present study did not support the hypothesis. The further study was needed to examine whether the degree and quality of the relation with friends with disabilities affect social consideration, and social and individual orientedness.

**Key Words:** people with disabilities, social consideration, social and individual orientedness

### 問 題 と 目 的

障害のある人とない人が特別に区別されことなく共に生きる社会が望ましい社会であるというノーマライゼーションの理念の発展には、障害のある人に対する社会の態度が大きく関わっている。川間（1996）は、障害のある人に対する態度に影響する要因として、①性別、年齢などの人口統計的要因、②交流経験、③価値観などの社会心理的要因、④知識などをあげている。このうち、②の交流経験の影響についての研究はこれまで多く行われている。

たとえば、黄・川田・山崎（1998）は、高校時の視覚障害のある生徒との「統合教育」の経験者と非経験者を対象に、当時の障害のある同級生に対する印象、その後の障害者問題に対する意識の変容について比較している。黄ら（1998）の結果では、「統合教育」を経験したことによって、障害者に対する意識の変容は見られにくいという結果が得られている。

また、安藤・平山（1987）は、小学校教師、中学校教師、肢体不自由養護学校教師の3グループの「統合教育」に対する知識、関心度、賛成度、必要度などを調査している。その結果、知識度において、肢体不自由養護学校教師が有意に高く、小学校教師、中学校教師を障害のある子どもとの経験群、非経験群に分けて比較したところ、小学校教師においては、経験群は非経験群より「統合教育」に対する関心度が高いという結果が得られた。

さらに、興石・坂本（2012）は、特別支援学校中学部の生徒との交流において生じる、障害の

ある生徒に対する意識の変容を、4名の中学生とのインタビューを通して検討している。その結果、障害のある生徒との接触経験の多い生徒と少ない生徒では、特に、交流前と交流中の意識が異なり、経験の多い生徒の方が、交流前には、障害のある生徒に対するイメージがより具体的で、交流中には、経験の少ない生徒と異なり、「活動の成否」ではなく「支援の成否」に視点が あることが明らかになった。

また、岡田（2013）は、精神障害者とのフットサルという直接的な交流体験を通して生じる、ボランティア大学生の意識・態度・行動の変容を、彼らとのインタビューを通して、特にそのプロセスに焦点を当てて検討している。その結果、自分の「役立てなさに戸惑う」といった違和感を感じる段階、「境界線を揺るがす」ような気持ちを覚える段階、そして「お互いを認めての関わりあい」を感じる段階から、障害のある人に対する「イメージの再構築」の段階を経て、「地域社会に身を置く」段階となることを示唆している。この「地域社会に身を置く」段階は、地域の一員としての自分の存在を意識し、社会に視点を置いた関与を考える段階だといえる。このように、岡田（2013）の結果からは、障害のある人との交流が、障害のある人に対する態度だけでなく、個人の視点を広く社会的な視点に広げるきっかけとなる可能性も示唆される。

本研究では、障害のある同級生との過去の交流経験の有無が、自己と社会との関係の認識に影響を及ぼす可能性を、社会考慮と社会志向性・個人志向性を通して検討することを目的とした。

社会考慮とは、「個人の生活空間を『社会』として意識している程度、または複数の個人からなる社会というものを考えようとする態度」のことである（斉藤，1999）。これまでは「社会的迷惑行為」などの否定的な行動との負の関係で検討されることが多かったが（吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折，1999），いわゆるコンピュータの西暦2000年問題に対する対処行動などとの正の関係を検討する研究も行われている（元吉，2002）。

この社会考慮に類似した概念に社会志向性がある。伊藤（1993）によれば、社会志向性とは、「他者あるいは社会の規範への志向性」であり、社会的環境に対する適応に関わる特性である。社会考慮が適応や発達とは無関係な概念であるのに対し、社会志向性は適応や発達と関係している点が異なると考えられる。一方、社会志向性と対で取り上げられる個人志向性は、「自分自身の内的基準への志向性であり、自分らしさを最大限に発揮」しようとする心理的適応に関わる特性である。この2つの特性は独立したものではなく、人間の適応に相互に関わる2つの側面とみなされている。

本研究では、女子大学生の、障害のある同級生と過ごした過去の経験の有無と現在の社会考慮、社会志向性・個人志向性の関係について検討した。

## 方 法

回答者 私立女子大学学生150名。

質問紙 ①障害のある同級生と同じ学校で学んだ経験の有無、その時期、その同級生の障害の種類、「統合教育」についての知識を問う質問項目からなる質問紙であった。

②社会考慮尺度（斉藤，1999）。「自分の行動がいかに社会に影響を与えているのかを考えることがある」「自分の暮らす社会で今なにが問題になっているのか気になる」など、斎藤（1999）の13項目のうち10項目に、「まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」までの5件法で回答を求める尺度であった。

③個人志向性・社会志向性尺度（伊藤，1993）。「人とのつながりを大切にしている」「自分の信念に基づいて生きている」などの18項目に「まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」までの5件法で回答を求める尺度であった。

手続き 一斉に質問紙に回答を求めた。回答時間は5～10分であった。

## 結 果 と 考 察

### 1. 社会考慮と社会志向性・個人志向性についての結果

社会考慮尺度（Table 1）については、これまでの研究（吉田ら，1999；元吉，2002）から1因子性が確認されているので、本研究でも1因子構造を想定して分析を行った。

Table 1 本研究で用いた社会考慮尺度の項目

1. 自分の行動がいかに社会に影響を与えているのかを考えることができる
2. 自分が暮らす社会全体のことについて考えることがある
3. 社会がいかに成り立っているかということについて考えることがある
4. 自分の行動が、同じ社会に暮らす他の人々にいかなる影響を及ぼすかを考えることができる
5. 社会全体がどのような方向に動いているかということに関心がある
6. 自分の暮らす社会が将来どのようになっていくのか気になる
7. 社会の変化が、自分の生活にどのような影響を与えるのかを考えることがある
8. 自分の行動が、同じ社会に暮らす他の人々にどのように受けとめられるかを考えることがある
9. 自分の暮らす社会で今なにが問題になっているのか気になる
10. 自分の生活と社会の仕組みがどのように関連しているのかを考えることができる

個人志向性・社会志向性尺度得点について因子分析を行った（最尤法・プロマックス回転）（Table 2）。これまでの研究（伊藤，1993）からこの尺度においては2因子が抽出されているので、2因子を設定して因子分析を行った。因子負荷量が.34に満たない2項目を削除して解釈したところ、これまでと同様、2因子が抽出された。第1因子は、「自分の信念に基づいて生きて

Table 2 個人志向性・社会指向性尺度の因子分析の結果（最尤法・プロマックス回転）

	因子1	因子2	共通性
<b>個人志向性因子 <math>\alpha=.764</math></b>			
*17 自分が本当に何をやりたいのかわからない	.899	-.183	.720
* 7 自分の生きるべき道が見つからない	.884	-.095	.727
13 自分の信念に基づいて生きている	.508	.19	.366
* 5 小さなことも自分ひとりでは決められない	.471	-.101	.196
3 自分の心に正直に生きている	.393	.013	.159
15 周りと反対でも、自分が正しいと思うことは主張できる			.181
<b>社会志向性因子 <math>\alpha=.778</math></b>			
10 周りとの調和を重んじている	-.185	.698	.425
14 人とのつながりを大切にしている	.081	.651	.470
12 社会（周りの人）のために役に立つ人間になりたい	-.039	.562	.301
8 他人に恥ずかしくないように生きている	.133	.508	.325
6 他の人の気持ちになることができる	.002	.476	.227
4 他の人から尊敬される人間になりたい	-.211	.466	.188
11 社会のルールに従って生きていると思う	-.018	.437	.185
16 社会（周りの人）の中で自分が果たすべき役割がある	.400	.431	.474
18 公正な判断ができる	.302	.351	.293
1 人に対しては、誠実であるように心がけている	-.044	.346	.110
<b>因子間相関</b>			
	1.000	.372	
	.372	1.000	

Note.\*5, \*7, \*17は逆転項目。得点を逆転して分析した。

#### 削除項目

- 2 自分の個性を活かそうと努めている
- 9 自分が満足していれば人が何を言おうと気にならない

いる」「自分の心に正直に生きている」からなる「個人志向性」因子、第2因子は「周りとの調和を重んじている」「他の人の気持ちになることができる」からなる「社会志向性」因子と命名した。伊藤（1993）でも「個人志向性」「社会志向性」因子の2因子が抽出されている。伊藤（1993）では削除された「公正な判断ができる」が本研究では「社会志向性」因子に、伊藤（1993）では「個人志向性」因子に入っていた「自分の個性を活かそうと努めている」「自分が満足していれば人が何と言おうと気にならない」が本研究では削除されるという違いは見られたが、基本的には伊藤（1993）と同じ因子構造が認められた。 $\alpha$ 係数は第1因子で.76、第2因子で.78であり、内的整合性が確認された。

## 2. 障害を持った同級生との経験

障害のある同級生と同じ学校で学んだ経験のある学生は121名、経験のない学生は29名と、経験のある学生の方が非常に多く、その時期としては、小学校時代が最も多かった（Table 3）。障害の種類はTable 4に示す通りであるが、不明と回答した回答者が最も多く44名であった。これは、一緒に過ごした時期として小学校時代をあげている回答者が多いことと関係しているものと考えられる。その同級生との当時の関係に対する回答から、「いつも付き合う友だちだった」と回答した回答者は4名、「少し付き合いがあった」73名、「全く付き合いがなかった」43名であり（Table 5）、障害のある同級生と同じ学校で学んだ経験はあっても、深く付き合う関係にあった回答者は少ないという結果であった。

Table 3 障害のある同級生と過ごした時期（名）

（複数回答可）				
保育園	幼稚園	小学校	中学校	高等学校
7	11	107	59	13

Table 4 同級生の障害の種類（名）

（複数回答可）							
発達障害	知的障害	ダウン症	自閉症	ADHD	パニック障害	アスペルガー	身体不自由
13	15	7	18	2	1	1	1
学習障害	歩行困難	会話・言語障害	手足不自由	聴力障害	視力障害	不明	
3	11	5	1	6	3	44	

Table 5 障害のある同級生との関係（名（％））

いつも付き合う	少し付き合う	付き合いなし	不明
4(3)	73(60)	43(36)	1(0.8)

## 3. 障害を持った同級生との経験の有無と「統合教育」についての知識

障害を持った同級生との経験の有無と「統合教育」についての知識の関係を示したのが、Table 6である。経験のある回答者もない回答者も、「③全く知らない」が過半数を占め、「①よ

Table6 障害のある友だちとの経験の有無と「統合教育」についての知識（名（％））

「統合教育」についての知識	経験あり	経験なし
①よく知っている	2(2)	1(3)
②聞いたことがある	43(36)	13(45)
③全く知らない	76(63)	15(52)

（経験あり121名：経験なし29名）

く知っている」と答えた回答者はそれぞれ2%, 3%と少なかった。「①よく知っている」「②聞いたことがある」と回答した回答者が何を通して知ったのかについては、経験の有無によらず、授業が最も多く、ほとんどを占め、ついでテレビが続いた。授業を通して知ったという回答者が多かったのは、本調査の回答者のほとんどが心理学科の学生であったことと関係していると考えられる。障害を持った同級生との経験の有無によって「統合教育」という言葉の知識に違いは見られなかった。

#### 4. 障害のある同級生との経験の有無と社会考慮得点, 社会志向性・個人志向性得点

障害のある同級生との経験の有無と社会考慮得点, 社会志向性・個人志向性得点の関係を示したのがTable 7である。それぞれの得点における障害のある同級生との経験の有無に関する1要因分散分析を行ったところ、どの得点においても、経験の有無の主効果は有意ではなく [ $F(1, 148) = 1.79, n.s.$ ;  $F(1, 148) = 0.41, n.s.$ ;  $F(1, 148) = 0.64, n.s.$ ], 経験の有無によってこれらの得点に違いは認められなかった。本研究では、障害のある同級生との経験がその人の社会に対する意識や志向に影響を与えていることを示す結果は得られなかった。

Table 7 障害のある同級生との経験の有無による得点の比較

	経験あり	経験なし
社会考慮得点	3.28	3.08
社会志向性得点	3.79	3.73
個人志向性得点	3.10	2.98

(経験あり121名:経験なし29名)

#### 5. 障害のある同級生との関係の深さと社会志向性・個人志向性得点, 社会考慮得点

障害のある同級生との関係の深さと社会考慮得点, 社会志向性・個人志向性得点の関係を示したのがTable 8である。それぞれの得点における障害のある同級生との関係の深さ(いつも付き合う・少し付き合う・付き合いなし)に関する1要因分散分析を行ったところ、どの得点においても、付き合いの深さの主効果は有意ではなく [ $F(2, 117) = 0.76, n.s.$ ;  $F(2, 117) = 1.72, n.s.$ ;  $F(2, 117) = 0.57, n.s.$ ], 付き合いの深さによってこれらの得点に違いは認められなかった。障害のある同級生との経験をその深さに着目して取り上げても、その人の社会に対する意識や志向に影響を与えていることを示す結果は、本研究では得られなかった。

Table 8 障害のある同級生との関係による得点の比較

	いつも付き合う	少し付き合う	付き合いなし
社会考慮得点	3.23	3.30	3.27
社会志向性得点	3.35	3.83	3.77
個人志向性得点	2.92	3.15	3.02

(いつも4名:少し73名:なし43名)

### 今 後 の 課 題

本研究の回答者は、障害のある同級生との関係がそれほど親密でない者がほとんどだったため、回答者数を増やして、障害のある同級生との交流経験の深さによる社会考慮, 社会志向性, 個人志向性の違いについて今後さらに検討する必要がある。また、これまでの研究でも、「統合教育」を経験したことによって、障害者に対する意識の変容は見られにくいという結果が得られ

ている（黄ら, 1998）。今後は、障害のある同級生との経験の有無だけではなく、教師をはじめ周りからの交流の働きかけの有無や交流の深さや内容による違いをさらに検討していく必要がある。

また、障害のある同級生との経験による影響は、その同級生の障害の種類によっても異なる可能性が考えられる。この点についても検討が必要である。

## 引 用 文 献

- 安藤隆男・平山 諭 1987 統合教育に対する教師の意識 特殊教育学研究, 24, 10-18.
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 64, 115-122.
- 川間健之助 1996 障害をもつ人に対する態度—研究の現状と課題— 特殊教育学研究, 34, 59-68.
- 黄 京性・川田智恵子・山崎喜比古 1998 若者の障害者意識に対する保健福祉学的考察—盲児との「統合教育」経験者と未経験者の比較を中心に— 日本保健福祉学会誌, 5, 49-60.
- 奥石あい・坂本 裕 2012 特別支援学校と中学校の交流及び共同学習が中学生の障害者への意識に与える影響に関する質的研究 岐阜大学教育学部研究報告, 14, 135-141.
- 元吉忠寛 2002 社会考慮が西暦2000年問題の認知・対策行動に及ぼした影響 社会心理学研究, 18, 1-10.
- 岡田隆志 2013 精神障害者との直接的な交流体験の機会がもたらす大学生の意識・態度・行動の変容プロセス—精神障害者とのスポーツによる交流活動を通して—日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 22, 48-62.
- 斎藤和志 1999 社会的迷惑と社会を考慮すること 愛知淑徳大学論集, 24, 67-77.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森 久美子・石田靖彦・北折充孝 1999 社会的迷惑に関する研究（1）名古屋大学教育学部紀要（心理学）, 46, 53-73.

〔2014. 9. 25 受理〕